

『ニコマコス倫理学』第一〇卷第七章における「スコレー」と幸福

栗 原 雅 美

ōnkei te tē eudaimonia ēu tē syolē eibai

幸福はスコレーのうちにあると思われる

『ニコマコス倫理学』第一〇卷第七章一一七七b四⁽¹⁾

はじめに

アリストテレスにおける「スコレー (syolē)」とは、ただ気尽に過ごすことのできる「余暇」、自由時間という意味に尽くされるものではない。⁽²⁾「スコレー」についての言及が最も多く見られる『政治学』第七、八巻、最善の国制の論考において、アリストテレスは「スコレー」の本質を「自足的活動」のうちに見出し、時間的、経済的な外的条件の充足をふまえた上で、政治的活動を含む、倫理的諸活動を内実とする「スコレー」のあり方を明らかにして

いる。「自足的活動」とは、活動から生じる所産やその有益性を目的とせず、まさに活動それ自体を目的とするものであり、ポリスと個人にとって目指すべき終極目的、すなわち「幸福」は「最も自足的な活動」として規定される。

「スコレー」と「幸福」は、共に自足的活動を本質とするという点において重なり合い、ここに、「スコレー」は「あらゆることの唯一の始源」⁽⁴⁾という重要な位置づけを獲得するのである。

従来の註釈、研究においては、概して、現代的な「余暇」との相違に着目し、広くギリシアを対象とした社会的、文化史的観点から、当時の「スコレー」に対する積極的な評価を指摘する傾向が顕著であり、アリストテレスの文脈に即した理解については、検討の余地を残している。

特に、観想的活動としての幸福を主題とする『ニコマコス倫理学』第一〇卷第七章は、アリストテレスの幸福論の核心を担う論考であり、その文脈の重要性は看過されるべきではない。本稿は、「スコレー」を当該論考の主題の理解に寄与するものとして、読解に基き、当該箇所における「スコレー」についての一解釈を提示することを課題とする。

一 第一〇卷第六章概観

前章第六章は、第一〇巻における「幸福論」の始まりに位置し、以下に展開される論考の方向性を示す役割を担う。第七章読解に先立ち概観する必要がある。

アリストテレスは、第六章冒頭において、人間にかかわることの終極目的と定められる幸福とは、性向 (*εἶς*)⁽⁷⁾ではなく、「現実活動 (*ἐνεργεῖα*)」のうちにあることを確認する。そして、諸活動のうちに見られる二つの区分―必要不可欠であり、他のもののゆえに選ばとられるもの／それ自体のゆえに選ばとられるもの―において、幸福は、「それ自体のゆえに選ばとられる諸活動のうちに属するも

のである」ことを明示する [76a30-35]。着目すべきは、アリストテレスがここで、「なにものをも欠くことなく、自足している」[76b5-6]と規定される幸福を、このような「それ自体のゆえに選ばとられる活動」とみなしていることである。

「あらゆるものを備え、なにものをも欠くことがない」という自足性、充足性を意味する「アウタルケイア (*αὐτάρκεια*)」は、ポリス成立の契機ともなる外的要件の充足を含意し、ポリスの政治的、経済的独立と結び付いて、広く人々に認められる理想として目指されるものであった。⁽⁸⁾

「アウタルケイア」には、(一) 自足性、充足性 (*self-sufficiency*)、⁽⁹⁾ (二) 自立性 (*independence*) という二つの側面がある。⁽¹⁰⁾ アリストテレスは、「それだけで生を選びとられるに値するものとなし、何ものにも不足しないものとなすもの」という規定によって、この自立性に焦点を定めていると言えるだろう。⁽¹¹⁾ このようなアリストテレスの視点は、*αὐτοαρκές* という語の成り立ちから、*αὐτο*の意味に着目することによっても明らかにすることができる。⁽¹²⁾ すなわち、人間である限り、端的に「自らにおいてのみ自足し、充足すること (*ἑαυτῷ ἀρκούν*)」⁽¹³⁾ はできない。当

該の倫理的論考において追求すべき「アウトルケイア」とは、まさに「われわれが定めるところ」としてアリストテレースが提示する、この自立的な意味、すなわち、「自らによって自らを充足させるもの」(*τὸ αὐτὸ ἀρκούν*)⁽¹²⁾としての「アウトルケイア」なのである。そして、その到達の可能性は、何か他のものための手段ではなく、それ自体が目的であり、本来的な価値をもつ活動の実現によって開かれる。それゆえに、アリストテレースは当該章において、自足性において規定される幸福のあり方を、「それ自体のゆえに選ばれる活動」から導かれるものとして示すのである。

そして、他のもののゆえに選ばれるもの／それ自体のゆえに選ばれるもの、という区分は、そのまま、アスコリアーとスコレーの区分に重なり合う。したがって、スコレーをめぐる論考は、それ自体のゆえに選ばれる活動のあり方を明らかにすることと不可分なのである。

その中でも、特に、アリストテレースが、自足的活動と「遊び」(*paidia*)との相違を指摘したことは、そのスコレー理解の特質を顕著に表している。アリストテレースによれば、遊びとは、持統的には活動できない人間が、さら

なる活動のための休息として必要とするものであった⁽¹³⁾。したがって、遊びは、必要性のゆえに求められるものとして、そもそもアスコリアー的であり、スコレーの内実とは相容れないのである。また、アリストテレースは、肉体的快楽を伴うような遊びへの逃避を「アポスコラゼイン(暇をつぶすこと、スコレーを無駄にすること)」[76b17]とも呼んでいる。肉体的快楽に関しては、奴隷にも自由人にも違いはない。十分な時間的、経済的余裕を備えた僭主たちが遊びへと逃避する様は、自足的活動を追求することを本質とするがゆえに幸福であるとみなされる「スコレー」の可能性を無駄にするものでしかなかったのである。

さらに、「遊び」に對置される「真剣さ」(*arête*)⁽¹⁴⁾は、ここで、単に行為者の態度を示すものだけでなく、「真剣となるに値する」という目的の性格づけをも担っていると考えられる。「優れた人」とは、「真剣となるに値すること」を真剣に為す人(*arête*)⁽¹⁵⁾であり、彼らは、自らの性向に即して、「遊び」ではなく、むしろ「真剣となるに値する」自足的活動を、より快いものとして選び択る。そして、アリストテレースは、そのような自足的活動のうちにも階層性が存し、より高次なものであるほどより一層幸福

なものであることを確認する。続く第七章の論考は、より高次な自足的活動の追求の先にある、最も高次な幸福は何か、という核心へ向かうのである。

二 当該章読解

二・一 導入部 [77a12-19]⁽¹⁴⁾

当該章冒頭、アリストテレースは、「幸福が徳にしたがった活動であるとするならば、それは諸徳の中でも最高の徳にしたがった活動」であり、「最高の徳とは最も優れたものに備わる徳である」ことを確認する [77a12-13]。当該章においてアリストテレースが論じようとしている幸福とは、或る一つの最高の徳にしたがった活動としての幸福、最も高次な幸福である⁽¹⁵⁾。

そして、「最高の徳とは人間のうちにある最も優れた部分に備わる徳である」という叙述からは、「理性」に備わる徳であることが示唆されていると考えることができる⁽¹⁶⁾。しかしながら、アリストテレースは、続けて、明らかに理性に合致する特質を列挙しながらも、「その最も優れた部分が理性であるにせよ、他の何かであるにせよ……」とすべ⁽¹⁷⁾て留保する形をとる。このことは、当該章の論考が「最も

優れた徳にしたがった活動」として規定される幸福を出発点とすることを明確に示すものであると同時に、「神的なもの」と「人間」とのかかわりを把握することは困難なものであるため、慎重にならざるをえないというアリストテレースの態度を表していると考えられる。そして、次の叙述が、以下の論述に直接つながる導入となり、この叙述を受けて、当該章の論考は、「終極的な幸福が観想的活動であること」という帰結が導かれる論拠を示す形で展開していく。

最善なものの固有の徳にしたがった活動が終極的な幸福であらう。それが観想的活動であることは、すでに述べられた。このことは、すでに述べたこと、そして、真理にも、一致すると思われるだろう。 [77a17-19]

従来の解釈上の焦点の一つは、この「終極的な幸福」⁽¹⁸⁾ *telos ēdōzion*」をいかに解するか、ということにある。本稿前節において確認したように、第一〇卷の幸福論は「自らによって自らを充足させるもの」としての「アウトアルケイア」によって規定される幸福のあり方を追求すると

いう方向性をもつ。このような論考の方向性に従えば、当該箇所「終極的である」ことは、自足的活動において実現される目的の所有、そして、それによってたらされる充足を意味すると考えられる。⁽¹⁹⁾

したがって、アリストテレスは、「終極的な幸福が観想的活動であること」という帰結の論拠を、観想的活動のもつ自足性、終極性を明らかにすることによって導くのである。

二・二 観想的活動の特質 [771a9-b4]

アリストテレスは導入部に続けて―その繋がりを明瞭にするために付言すれば、「終極的な幸福とは観想的活動である」ということが、なぜすでに述べたことも真理とも一致すると思われるか、といえ、なぜなら―まず、観想的活動が「最高の活動」であるから、と記す [771a9-20]。観想的活動が最高の活動でありうるのは、「理性」が各々の人間にとって最高の部分であるというだけでなく、いわば「魂の目」である⁽²⁰⁾「理性」の見る対象が、「最高のもの」であることによっている。

以下、この叙述から始まる各文は、観想的活動の特質と

して並列的に列挙されることが多い(最高の活動であること、持続的であること、快楽を伴うこと、最も自足的であること、それ自体のゆえに愛求されること、スコレー的であること)。しかしながら、本稿では、各特質を順に検討し、その論点を見定めることによって、これらの特質がいずれも、観想的活動が最も厳密な意味で「自足的」であることを示していることを明らかにしたい。それは同時に、スコレーにかかわる叙述の位置づけをより明確にとらえることを可能にするものである。

本文に戻り、次にアリストテレスは、観想的活動は「最も持続的」であるから、と言う。ここで私は、アリストテレスが「持続性」(*to, ouvxes*)を「連続性」(*to, epekes*)⁽²¹⁾の特殊な形として捉えていることに着目したい。アリストテレスによれば、あるものが「連続的」である、ということは、空間的にであれ、時間的にであれ、他のものがその直後に続いていることを意味する。あるものが隣り合い、ある部分において接していること(*to, ephelenon*)もまた、「連続的」であることの一つである。そして、さらに両者が接するところが全く同一であること、すなわち *ouvxes* という語の成り立ちにも見られるように、両者

が一つになっていることが「持続的」である、とアリストテレースは解している。

従来の注釈は主に、理性の対象が必然で永遠なものであることから、観想的活動の持続性を説明している。²²⁾しかし、アリストテレースが、「何らかのことを為すこと」に比して観想的活動がより持続的であると述べているように、ここでは、理性の対象のあり方においてではなく、あくまでも、活動のあり方が比較されていると考える方が相応しいと私には思われる。つまり、「歩くこと」や「建築すること」といった「何らかのことを為すこと」は、目的へと至るまでに時間的経過を伴う。対して、「見ること」「生きること」と同様に、「観想すること」²³⁾は、その活動自体が目的であり、時間的経過を伴わない。その意味において、「最も持続的」でありうるのである。したがって、観想的活動の備える「持続性」とは、次から次へと絶え間なく継起するような時間的継続としてではなく、始まりと終わりが同時に見出されるような活動のあり方として解すべきであると私は考える。

そして、このような活動の間には、もう一つの重要な相違がある。それは「何らかのことを為すこと」はその目的

への到達と同時に、その活動が終息するのに対して、「観想的活動」は、目的への到達において終息するのではなく、最も充実な仕方では実現される、ということである。そして、続いて提示される、観想的活動に伴う快楽についての叙述は、このような目的への到達において見出される観想的活動のあり方を、不足なく示すものであることを、明らかにしたい。

アリストテレースは、「幸福には快楽が混ぜあわされていなければならない」ということを、「我々が思っている」こととして示し、「徳にしたがった活動の中では、知恵にしたがった活動が最も快い」ということを、「一般的にも認められている」こととして記す [77a28-29]。そして、続けて「いずれにせよ、知を愛することは、純粋さと確固であることにおいて、驚くべき快楽をもっていると思われる」と述べた上で、「しかし、その快いあり方は、探求している人々よりも、知っている人々にとっての方がより一層快い」ということを、「まさしくその通りである」として明示している [77a28-27]。このようなアリストテレースの口調からは、観想的活動に快楽が伴うことは自明のこ

ととして、「探求している人々よりも (*τῶν ζητούντων*)、知っている人々にとって (*τοῖς εἰδόσι*) の方がより一層快い」という末尾の一節に論点があることを読み取ることができる。

すでに「持続性」の特質の検討に際して指摘したように、まず、「知っている人々 (*τοῖς εἰδόσι*)」、すなわち字義的に「見てしまった人々」は、「見る」という「エネルゲイア」のあり方を体现するものとして提示されていると考えられる。「見る」という活動は「見ている」ことが同時に「見てしまった」ことでもあり、時間的経過を伴わない。そして、「見てしまった」ことは活動の終息を意味するものではなく、まさに「見ている」「知っている」という形で完全に發揮されているのである。

さらに、ここで「知っている人々」が「無知である人々」に対比されるのではなく、「探求している人々」に対比されていることに着目しなければならない。アリストテレスは、ここで論じている観想的活動が、さらに愛し求めるべき知をもつような、探求の過程にある知の営みではなく、その知への到達をもって「見てしまっている(知っている)」という完全な活動が実現される、究極的な

ものであることを示したのである。

したがって、当該章においてアリストテレスは観想的活動に見られる特質をただ順に列挙しているのではなく、まさにそれ自体が目的として為される、より厳密な意味での自足的活動のあり方を追求していることが分かる。つまり、このような活動によって実現可能な自足性、すなわち自立性こそが当該章を貫く観点となっているのである。

それゆえに、アリストテレスは続けて、「ここで言われている自足性(自立性)」が、観想的活動について当てはまるものである、と確認する[77a27-28]。観想する哲学者が、「最も自足的」でありうるのは、観想的活動が自らのうちにある理性によって為されるものであるがゆえに、活動の契機として、自ら以外のものを必要としないからである。

勿論、アリストテレスは、「生きるために不可欠なもの」を備えることの必要性にも言及するが、このような必要性の充足の上で、より善く生きることの追求へと向かっていたことは明らかである。そして、より自足的な活動であればあるほど、外的な要件への依存が少なくなることを確認するために、ここで初めて、アリストテレスは、

「正しい人」「節制のある人」「勇敢な人」といった倫理的諸徳を備えた人々の活動と、「知者」の活動を対比させる[77a28-b1]。倫理的諸徳を備えた人々が、その徳を発揮するためには、そのような徳を発揮するにふさわしい状況を要する。たとえば、勇敢な人であろうとするためには、勇敢さを発揮する状況が、鷹揚な人であろうとするためには、十分な財力としかるべく出資する相手や物事がなくてはならない。⁽²⁴⁾ 対して、哲学者の場合は、観想的活動をしようとするために、何らかの特定の状況や、備えるべき外的な道具を必要とはしないのである。⁽²⁵⁾

さらに、アリストテレースは、行為の結果という観点から「観想的活動そのもののみがそれ自体のゆえに愛される」[77b1-2]と行うことを導く。実践的なものは、そもそもその得るところのもののために為されるがゆえに、その行為の結果として常に何らか得るものがある。[77b1-2]しかし、観想的活動からは、その活動以外には、何も生じない。つまり、観想的活動は、まさにそれ自体のゆえに求められるものである。

このようにして、アリストテレースは、観想的活動のみ

が唯一、厳密な意味において、「自足的」でありうることを明らかにする。そして、この先に、「スコレー」の導入から、スコレーと幸福とめぐる一連の論述が導かれる。はたして「幸福はスコレーのうちにある」とはいかに解されるべきなのであろうか。

二・三 スコレーと幸福 [77b4-26]

幸福はスコレーのうちにあると思われる。というのも、われわれはスコレーするために、自ずからスコレーを失うのであり、平和を得るために、戦争をするのであるから。

[77b4-6]

この叙述における「スコレー」を、あらゆる活動のために必要とされる条件と何ら変わることはない、時間的、経済的余裕を意味するものとして解することは、不適切であると言わなければならない。これまでの考察をふまえるならば、「スコレー」は「より自足的な活動の追求」を本質とするものであるからこそ、「最も自足的な活動」を焦点とする当該論考において導入されていると考えることができる。つまり、アリストテレースは、当時自明な通念で

あったとみなされている「スコレー」と「幸福」との関わりを単に繰り返しているのではなく、独自の「スコレー」という観点から、観想的活動としての「終極的な幸福」のあり方を明らかにしようとしているのである。

「スコレーとアスコリアー」、「平和と戦争」という関係性において、スコレー、平和をこそ目的として追求すべきである、ということについては、『政治学』においてもアリストテレスが繰り返し確認しているところである。⁽²⁷⁾この序列は、アスコリアーや戦争が、必要性や有用性のゆえに、それ自体以外のもののために選ばとられるものであるのに対し、スコレーや平和は、美しさのゆえに、それ自体のゆえに選ばとられる、という明確な相違に基づくものであった。そして、このような区分に従うならば、政治的活動もまた、徳にしたがった活動として、それ自体のゆえに選ばとられるという点で、スコレー的であると言えることができる。

しかし、ここでアリストテレスは、まず、戦争を挙げ、いかにしてもそれ自体のゆえに選ばとられることのないものとして「完全」に(*τελειωώς*)アスコリアー的である

と述べた上で、続けて、政治的活動についても、何らか他のものを得るという点で、「アスコリアー的」であると言うのである。さらに、アリストテレスは、政治的活動と戦争は「美しさと偉大さ」において優れたものであるが、「或る目的を旨し、それ自体のゆえに選ば取られないものである」ゆえに「アスコリアー的」であると重ねて記している。アリストテレスはここで、「それ自体のほかには、いかなる目的も目指さない」という、より厳密な意味において「スコレー的」であることを解しているのである。

そこで、改めて着目すべきは、アリストテレスの著作を通じて、唯一当該箇所において用いられている「自らスコレーを失うこと」(*ἀπορροή*)⁽²⁸⁾という中動相のもつ意味である。「それ自体のゆえに選ば取られるもの」に對置される「アスコリアー」は、それ自体以外のものに関することによって「スコレーを失う」。つまり、その活動の契機が活動それ自体にはなく、外的な要因に拠る、ということが「スコレー的」であることを妨げるものであった。しかし、ここで、「スコレー的」であることを妨げるものは、もはやそのような外的な要因ではない。「それ自体のほかには、いかなる目的も目指さない」というより厳密な意味

での「スコレー的」であることに比しては、それまで「スコレー的」であったものも、「アスコリアー的」なものとなる。⁽²⁹⁾そして、そのようにより「スコレー的」なものに比して、それまで「スコレー的」であったものを「アスコリアー的」なものへと塗り替えていくのは、より「スコレー的」な活動の追求へと向かう人自らのなのである。

したがって、ここにおいて「スコレー的」であること、とは、もはやその先に追求すべき活動をもたない、端的にそれ自体が目的であるという「終極」においてのみ見出されるものであることを明らかにすることができよう。当該章における「スコレー」とは、まさに「終極目的への到達」⁽³⁰⁾を意味しているのである。それゆえに、私は、当該箇所を、「終極的な幸福」は、「スコレー」、すなわち、終極目的のうちにある、という意味において解すべきである⁽³¹⁾と考える。

そして、アリストテレスは、次の一節をもって、当該章導入部において提示した帰結が導かれることを示すに至る。

理性の活動である観想的活動には、人間である限りにおける、

自足性、スコレー的であること、あくことのなさ、があり、
幸いな人に帰せられる他のすべてのものは、明らかにその
活動にしたがったものである。そして、まさに人間の
終極的な幸福とは、この活動であることになる。<sup>[77b
21-25]</sup>

これまでの考察によれば、ここに示されているのは、終極に到達した「スコレー」のあり方であると解することができる。それは、端的にそれ自体のゆえに求められる活動であり、その先にさらに追求すべき目的を一切もたないという意味において、まさに「終極」である。あらゆる目的連関をつきぬけている、とも表現できるだろう。絶えざる活動の追求は、ここに初めて止まり (ἐξέτα)、人間は、観想的活動という充全な活動の実現のうちに留まること (ἀρετή) ⁽³²⁾において、永遠性に与るものとなりうる。アリストテレスは、このような境地を「ある種の静寂と静止にも似ている」⁽³³⁾と言う。ただしそれは、疲労を癒し、さらなる活動のために必要とされる休息ではない。それはいわば、あらゆる人間の営みの「実り」⁽³⁴⁾として、人間の生を完成させるものなのである。

結びにかえて

本稿の考察を通じて明らかにしたことをここで振り返り、今後の展望を示すことで結びにかえるものとする。

アリストテレスにおいて「スコレー」のあり方を問うことは、その内実となる活動、活動を為す人のあり方を問うことにほかならなかった。アリストテレスは、「スコレー」の追求によって、最善の生が導かれると考えたのである。なぜなら、「スコレーする」という活動自体が、より自足的な、より優れた活動へと向かうことを意味するからである。その内実となる諸活動は、「自足性」という観点によって、階層的に位置づけられる。したがって、広くは、自足的活動はすべて「スコレーすること」と言い換えられるが、常により自足的、すなわち、よりスコレー的活動を追求する過程においては、「スコレーすること」であったものが、よりスコレー的活動に比して、「アスコリアー的なもの」に塗り替えられていく。しかし、このような追求は無限に続くものではない。もはやその先にいかなるより自足的な活動もなく、まさにそれ自体において最も自足的である、という終極があるのである。その活動のみ

が、「アスコリアー的なもの」に塗り替えられることなく、まさに「スコレー的なもの」でありうる。そして、人間の到達しうるこの終極において、人間の生は完成を見る。人間の目指すべき「終極的な幸福」はここに見出されるのである。また、別稿を要する課題となるが、人間に到達可能な終極の追求が、同時に、人間のなものを超える神的なものを追求することに繋がっていることも見逃してはならない [77b26-29]。

そこで再び問われるのが「実践」と「観想」の関係である。本稿は、既存の諸見解の論拠としてスコレーを用いるのではなく、あくまでも、アリストテレスにおけるスコレーとはいかなるものであるのか、そこからスコレーと幸福はいかなる関りのもとに捉えることができるか、という問いを考察の契機とし、その結果、より自足的な活動を追求するという階層性をもった「スコレー」のあり方を『政治学』に学び、その頂点となる最も高次な「スコレー」のあり方を『ニコマコス倫理学』最終巻に見るに至った。

人間は、倫理的な諸活動を含む、諸々のスコレー的な活動を、絶えずアスコリアー的なものへと塗り替えながら、その先に初めて、観想的活動を内実とする、終極としての

スコレーに到達しうる。「スコレー」を一つの観点とするならば、実践と観想は対立するものではなく、いずれも、より高次の自足的活動を追求する、という共通の地平から導かれるものとなる。そして、スコレーのためにはアスコリアが必要であり、アスコリアもまたスコレーなしには完成されないように、実践と観想もまた同様の関係のもとにある、という一つの理解が得られるのである。さらに進めていえば、『ニコマコス倫理学』最終巻における主題が、スコレー的なものであるとすれば、それに比して、『政治学』の主題はアスコリア的なものと位置づけることができるだろう。両著作の関係をめぐる諸議論に立ち入ることはできないが、アスコリアがスコレーによって完成されるように、『政治学』、『ニコマコス倫理学』両著作において提示される「幸福」「最善の生」をめぐる論考の間には、断絶や矛盾ではなく、密接な関係が見出されるべきであると私は考える。このように、「スコレー」の探求は、アリストテレスにおける「実践哲学」を改めて読み解く可能性をも示唆するものである。

- (1) テキストは Bywater, I. (ed.), *Aristotelis Ethica Nicomachea*, Oxford Classical Text, (Oxford, 1894) を用いた。

出典箇所の表記はすべて OCT 版に従う。なお、当該章引用に際しては、行数末尾二桁のみを記す。その他の著作略記は慣例に従った。

- (2) 既存の邦訳では「余暇、閑暇、余裕、ゆとり」などが用いられ、訳注を付し理解を補う形となっている。本稿では、スコレーが消費される時間という意味に止まるものではなく、内実となる活動と常に不可分であることを強調する必要があると考えたため、また、アスコリアとの対比を明確にできるという利点から、原語表記を用い、特に多用される動詞「スコラゼイン」には「スコレーする」という表現を用いた。なお、「スコレー」の意味を概略的に示したものと比べ、J. Ritter und K. Gründer (Hrsg.), *Historisches Wörterbuch der Philosophie*, (Basel, 1971-), Bd. 7, s. v. 'Muße' S. 257-260, Bd. 8, s. v. 'Scholastik' S. 1332-1336; J. Pieper, *Musse und Kult*, (München, 1947), S. 76, 87. (稲垣良典訳『余暇と祝祭』(講談社学術文庫) 一九九八(九七頁); E. Braun, *Aristoteles und die Paideia*, (Paderborn, 1974) S. 166.
- (3) H. Bonitz, *Index Aristotelicus*, (Berlin, 1955), S. 714, 118.
- (4) Pol. VIII.3, 1337b29-33; なお、『政治学』における「ス

「ロー」について、拙論「アリストテレス『政治学』における「スロー」——『ニコマコス倫理学』における「スロー」への新たな予備的考察——」『リベラリアニヤ』第53号(1001)参照。

- (5) Cf. Friedrich Solmsen, 'Euripides' Ion im Vergleich mit anderen Tragödien', *Hermes*, Bd.69 (1934), S.390-419. *idem.*, 'Leisure and Play in Aristotle's Ideal State' in *Kleine Schriften* II. (Hildesheim, 1968), pp.1-28; Ernst Koller, 'Musse und musische Paideia-über die Musikaporetik in der aristotelischen Politik', *Museum Helveticum*, Bd.13(1956), S.1-37, S.94-187.

- (6) Cf. Marcus Wheeler, 'Self-sufficiency and the Greek City' *Journal of the History of Ideas*, vol.16(1955), pp.416-417.

- (7) H.G.Liddle, R.Scott, and H.S.Jones, *A Greek-English Lexicon*, (rev.9th ed.)(Oxford, 1996) s.v. 'autarkeia' pp. 278-279.

- (8) EN. I. 7.1097b14-15

- (9) このように「アウタルゲイア」のもつ二つの側面に着目しているものとして、高橋久一郎「アリストテレスの『エネルゲイア』論の行為の理論としての現代的意義の研究」(平成七年度科学研究費補助金一般研究(C)研究報告

書,一九九八)。

- (10) J.A.Stewart, *Notes on the Nicomachean Ethics of Aristotle*, (Oxford, 1892) p.93; J. Burnet, *The Ethics of Aristotle*, (London, 1908), p.32; 加藤信朗訳『ニコマコス倫理学』(岩波書店 一九九四)訳注 三三八頁参照。

- (11) J. Burnet, *op.cit.*, p.33.

- (12) *do.*

- (13) EN. IV. 8.1127b33, 1128a30, X. 6.1176b34-35; Pol. VIII. 3.1337b35-1338a1, 5.1339b15-17

- (14) 当該章の構成については、通常、一連のスコレーの叙述も含め、*te yep* [77a19] に対応する小辞 *te* によって導かれるものとして、並列的に六つの理由として各文か位置付けられる。しかし、小辞の対応関係は厳密であるとは言えず、このような叙述のスタイルについては、写本上の問題も含め、検討が必要である。現時点では、77a19-b4に見られる観想的活動の特質が、明確な対応箇所とはいえないまでも、すでに著作中において言及された特質であるのに対し、スコレーにかかわる叙述は、第一〇巻において初めて導入されたものであること、また、77a19-b4では、各文とも、観想的活動、あるいはそれを受ける代名詞、その他の特質が主語になっているのに対し、当該箇所において初めて「幸福」が主語として示されていることを確認す

るに止める。なお、本稿と同様に77b 4以下を一つの構成語とみなしているのは、Burnet *Aristotle on Education—being extracts from the Ethics and Politics*, (Cambridge, 1967) pp.84–101; St.Thomas Aquinas, *Commentarii in decem Libros Ethicorum ad Nicomachum*, X. Lect.X, XI, 2080–2099; P. Fr. Raymond, M. Spiazzo (ed.), *St. Thomae Aquinantis in decem Libros Ethicorum Aristotelis ad Nicomachum Expositio*, (Rome, 1949) p.545.

- (15) このことは、前章末尾、幸福は「徳にいたがった活動動のいかにある(ἐν ταῖς κατὰ ἀρετὴν ἐνεργείαις)」[77a10]と複数形が用いられている点に注目、前該章冒頭では「徳にいたがった活動(κατὰ ἀρετὴν ἐνεργεία)」[77a12]と単数形が用いられていて、このことから明らかである。なお、このように当該章の論考を、最も高次の幸福のあり方を示すものとする見解は、Robert Heinaman, 'Eudaimonia and Self-sufficiency in the Nicomachean Ethics', *Phronesis*, vol.33 (1988) pp.31–35, 25を参照せよ。

- (16) 「タラチスミス」は睡眠の関連しているが、Stewart, *op.cit.*, p.441, 参照。

- (17) 「…それが本性に、支配し、導くものがある、美しきことと、神的事であることとについての類似を、よく示しなれる。

ので、また、それ自身が神的なものであるにせよ、あるいは、われわれがもっているうちで、最も神的部分であるにせよ…」[77a13–16] じならの特性は、いずれも後述される理性の特性に一致する [77b26–78a8]。従来の注釈では、この言明の曖昧さを補うかのやうに、『ニコマコス倫理学』第六卷における魂の区分、その区分に応じた知の領域についての論考について言及するものが多く見られるが、私はむしろ、前該章冒頭におおむね、あくまでも、最高の徳の実現として、終極的な幸福が導かれてくることに着目すべきであると考える。本稿と同様の見解を提示しているものとして、A. Grant, *The Ethics of Aristotle*, 2 vols. (London, 1885), vol.2, p.335; T. B. Eriksen, *Bios Theoretikos—Notes on Aristotle's Ethica Nicomachea* X.6–8, (Oslo, 1976), p.72.

- (18) 観想と実践の関わり、第一巻における最高善の規定との整合性をよく見て、Dominant-Inclusive End Argument によって表わされる諸議論の整理については、本稿における扱ひを参照。

- (19) Cf. Metaph. V.16.1021b23–25; Pol.I.2.1252b32–1253a1; Grant, *op. cit.*, vol.1, pp.224–330; W. D. Ross, *Aristotle's Metaphysics—a revised Text with introduction and Commentary*, 2 vols. (Oxford, 1924) vol.1, p.332.

- (20) Metaph. II.1.993b 9-10
- (21) 『自然学』第五卷第三章参照。
- (22) 観想的活動の持続性については EN.I.10.1100b11-17 にも言及があり、観想的活動において理性が対象とする最高のものが、必然で永遠なものであるがゆえに、このような持続性をもたらされる、という解釈が一般的である。しかし、私が問題であると考えるのは、永遠であることが、永遠ではありえない人間において、持続性としてどのように現れるのか、という点である。一つには種として生殖を通じて与りうる永遠性があるが、このマリス・タレー・スは理性による「活動」によって直接的に与ることの可能性を示している。私は考える。なぜ『自然学』における連続性と持続性の定義は「*εἰς τὸ αἰὲν*」David Bostock, 'Aristotle on Continuity in Physics VI', in Lindsay Judson (ed.), *Aristotle's Physics - A collection of Essays*, (Oxford, 1995), pp.179-212. 参照。
- (23) Cf. Metaph. IX.6.1048b18-36, 8.1050a21-1050b 1
- (24) EN. X. 8.1178a28-1178b 1
- (25) EN. X 8.1178a23-25
- (26) comp. J.L.Stocks, 'XOXOH, The Classical Quarterly, vol.30(1936), p.117.
- (27) Pol. VII. 14.1333a30-36, VIII.3.1337b29-35
- (28) H. W. Smyth, *Greek Grammar*, (rev. ed.) (Harvard, 1984) p.392.; 中動相の意味合いを指す工夫がなわれている語干「*τινέσθαι*」T.Irwin, *Aristotle Nicomachean Ethics*, (2nd. ed.) (Indianapolis, 1999) p.164, 309. "deny ourselves leisure (εὐνομίαを断念する)"
- (29) 思想的背景を考慮する必要があるが、古註においてもこのように「スコレー」な活動の間に階層的な優劣があるという解釈を見ることがある。Michaelis in *Ethica Nicomacea Commentaria*, 179v10-39 G. Heylbut(ed.), *Commentaria in Aristotelem Graeca*, vol. XX. Eustrath et Michaelis et Anonyma in *Ethica Nicomacea Commentaria*, (Berlin,1892), p.586.
- (30) Eugen Rolfes, *Aristoteles Nikomachische Ethik*, (Leipzig, 1933), S.272.
- (31) したがって私は、前掲箇所におけるスコレーは観想的活動の単なる属性ではなく、むしろマクロの見解には賛同しない。Eino Mikkola, 'Scholē << bei Aristoteles' *Arctos Acta Philologica Fennica*, NF 2 (1958), S. 83.
- (32) ただし、スコレーの語源 *'ἐξευ'* の意味は多岐にわたる。一説では捉まざるを得ない。L. Meyer, *Handbuch der Griechischen Etymologie*, (Leipzig, 1902) Bd. IV, S. 200.; comp., Mikkola, *op.cit.*, S. 72, 86.; H.Arendt, *The*

Life of the Mind, (San Diego, 1971) pp.92-93.

(33) De Anim. I. 3.407a32-33

(34) Grant, *op. cit.*, vol.2, p.334.

参考文献

・一次文献

Bywater, J. (ed.), *Aristotelis Ethica Nicomachea*, Oxford Classical Text, Oxford, 1894.

Ross, W. D. (ed.), *Aristotelis Politica*, Oxford, Oxford Classical Text, 1957.

— *Aristotelis De Anima*, Oxford Classical Text, Oxford, 1956.

Jaeger, W. (ed.), *Aristotelis Metaphysica*, Oxford Classical Text, Oxford, 1959.

Barnes, Jonathan (ed.), *The Complete Works of Aristotle - The Revised Oxford Translation*, 2 vols, Oxford, 1984.

Dirmeier, Franz (Übers.), *Aristoteles Nikomachische Ethik*,

Berlin, 1956.

Irwini, T. (tr.), *Aristotle Nicomachean Ethics*, (2nd ed.), Indianapolis, 1999.

小澤克典訳『アリストテレス ニコマコス倫理学——幸福論』

弘文堂出版社、一九八七

加藤信郎訳『アリストテレス全集二二 ニコマコス倫理学』

岩波書店、一九九四

高田三郎訳『ニコロコス倫理学』(上・中・下) 岩波文庫、

一九七一

Heylbut, G. (ed.), *Commentaria in Aristotelem Graeca*, vol.

XX, *Eustratii et Michaelis et Anonyma in Ethica Nicomachea Commentaria*, Berlin, 1892

Raymundo, P. Fr. M. Spiazzo (ed.), *St. Thomae Aquinatis In decem Libros Ethicorum Aristotelis ad Nicomachum Expositio*, Rome, 1949.

Litzinger, C. I. (tr.), St. Thomas Aquinas Commentary on the Nicomachean Ethics, Library of Living Catholic Thought, 2 vols, Chicago, 1964.

・二次文献

Arendt, H., *The Life of the Mind*, San Diego, 1971

Bonitz, H., *Index Aristotelicus*, Berlin, 1955.

Bostock, David, 'Aristotle on Continuity in Physics VI', in Lindsay Judson (ed.), *Aristotle's Physics - A collection of Essays*, (Oxford, 1995), pp 179-212.

Braun, E., *Aristoteles und die Poetika*, Paderborn, 1974.

Burnet, J., *Aristotle on Education—being extracts from the Ethics and Politics*, Cambridge, 1967.

——, *The Ethics of Aristotle*, London, 1908

Eriksen, T. B., *Bros Theorenkos—Notes on Aristotle's Ethica Nicomachea* X.6-8, 0 slo, 1976.

Grant, A., *The Ethics of Aristotle*, 2 vols. London, 1885.

Heinaman, Robert, 'Eudaimonia and Self-sufficiency in the Nicomachean Ethics', *Phronesis*, vol.33(1988) pp.31-35.

Joachim, H. D. A. Rees, (ed.), *Aristotle The Nicomachean Ethics*, Oxford, 1951.

Koller, Ernst, 'Musse und musische Paideia—über die Musikaporetik in der aristotelischen Politik', *Museum Helveticum*, Bd. 13(1956), S. 1-37, S. 94-187.

栗原雅美「アリストテレス『政学』における「レクチャー」—『ニコマコス倫理学』における「レクチャー」〈恒常の学理的考察〉」『レクチャー・エッセイ』第五十三号(110011)

Liddle, H. G., R. Scott, and H. S. Jones, *A Greek-English Lexicon*, (rev. 9 th ed.), Oxford, 1996.

Mikkola, Eino, 'Schöle << bei Aristoteles' *Arctos Acta Philologica Fennica*, NF 2 (1955)

Meyer, L., *Handbuch der Griechischen Etymologie*, Leipzig, 1902.

Pieper, J., Musse und Kult, München, 1947. (稲垣良典『余暇と祝祭』講談社学術文庫 一九九八)

Ritter, J. und K. Gründer, (hrsg.), *Historisches Wörterbuch der Philosophie*, Basel, 1971-

Rolfes, Eugen, *Aristoteles Nikomachische Ethik*, Leipzig, 1933.

Ross, W. D., *Aristotle's Metaphysics—a revised Text with introduction and Commentary*, 2 vols. Oxford, 1924.

Smyth, H. W., *Greek Grammar*, (rev. ed.), Harvard, 1984.

Solmsen, Friedrich, 'Euripides' Ion im Vergleich mit anderen Tragödien/Hermes, Bd 69(1934), S. 390-419.

—— 'Leisure and Play in Aristotle's Ideal State' in *Kleine Schriften II*, (Hildesheim, 1968), pp.1-28.

Spashott, Francis, *Taking Life Seriously—A Study of the Argument of the Nicomachean Ethics*, Toronto, 1994.

Stewart, J. A., Notes on the *Nicomachean Ethics of Aristotle*, Oxford, 1892.

Stocks, J.L., 'ΣΧΟΛΗ', *The Classical Quarterly*, vol.30 (1936) pp.177-187.

高橋久一郎「アリストテレスの『エニカルギア』論の注釈

理論としての現代的意義の研究」(平成七年度科学研究費

補助金一般研究)研究報告書、一九九八

Wheeler, Marcus, 'Self-sufficiency and the Greek City',

Journal of the History of Ideas, vol.16(1955), pp.416-417.

二〇〇二年五月二日受稿

二〇〇二年五月三〇日レフエリーの審査
をへて掲載決定

(一橋大学大学院博士課程)